

乳幼児の事故防止に関する 母親の意識についての調査研究

野久保美紀, 岡部 充代, 宮田さおり, 櫻井しのぶ

Abstract

Inadvertent accidents are always major causes on children's death. Particularly the accidents on infants often happen indoor. The purpose of this study is to investigate correlation among the accidents in infancy, infants' domestic background and the mothers' consciousness on the prevention of accidents.

The data were collected from 69 mothers whose children have a routine health examination for children aged 18 months at the public health center T city Mie prefecture, between August and October 2004, using open-end interview and a questionnaire.

The results are as follows:

1. Regarding mothers' consciousness on the prevention of infants' accident, a group of mothers who have ever read Maternal and Child Health Handbook is more careful of an accident in infancy than a group of mothers who have never read it.
2. There aren't any significant correlations between the infant's domestic background and an accident in infancy.
3. Regarding the infants' domestic background and the mothers' consciousness of the prevention of an accident, a group of mothers who don't live with their parents (it means nuclear family) is more careful of an accident in infancy than a group of mothers who live with their parents. Besides, a group of mothers who have only one child is more careful of an infants' accident than a group of mothers who have some children.
4. There aren't any significant correlations between the experience of an infant's accident and mothers' consciousness on the prevention of an infants' accident. But it tends that mothers who experienced an accident which their children fell down have higher consciousness of the prevention of an accident.

Key Words: infant, inadvertent accident, consciousness about prevention of accident

I. はじめに

日本において1960年以降、1～14歳の死因の第1位は不慮の事故によって占められており、0歳児においても毎年上位である¹⁾。また、乳児では死亡には至らないまでも重症な外傷や後遺症の残ってしまう事故が多く起きている²⁾。不慮の事故の年齢階級別の内訳は0歳児以外では交通事故が最も多く、0歳児では窒息が72.4%と一番多く、交通事故は9.9%、溺死及び

溺水が4.6%、転倒・転落3.9%となっている¹⁾。

また、子供の不慮の事故を男女別で見ると、男児のほうが多く死亡しており、0～4歳ではそれほど男女差はないが、年齢が高くなるにつれて男女差が見られ10～14歳になると男児のほうが女児より2倍ほど多くなる。

このように乳幼児の事故の原因は、子どもたちの運動機能の発達と生活に大きく影響される。1歳前後では周囲の環境に積極的にアプローチしていく段階であるが、歩行機能が確立されていないため、家庭内での事故が起

きやすい。また2歳前後では好奇心が強く大人のまねをし始める段階であるとともに、自由に歩け、さらに高いところにのぼれるようになるため、交通事故など家の外での事故が多く転倒・転落も増えてくる。しかし、4歳までの事故の大半は居室内で起こっている²⁾。

健診を利用したアンケート調査^{3) 4)}によると、1歳6か月の時点でも病院を受診するような事故を経験した事のある児は多く、その事故発生の時期は1歳前後に集中している。これらのことより、事故防止のための保護者への安全教育は、子どものそれぞれの発達段階に応じたものが必要であり、安全教育などの介入の時期については、児が1歳になるまでが望ましいと考えられる。

II. 研究の目的

「健やか親子21」で今後10年以内の目標として挙げられている、事故による死亡率の半減、全家庭における事故対策の実施のためには、保護者への安全教育が不可欠である。これまでも乳幼児健診で集団指導やパンフレットを用いた啓発教育が行われ、活動後には事故発生の減少が報告されている^{5) 6)}。その効果的な指導の方法を検討するためには、保護者が日常生活において乳幼児のどのような行動に危険を感じ、環境整備をしたり子どもに対し安全教育をしたりして危険を回避しているか、またそれらの安全の為の行動を阻害する因子があるとしたら何が挙げられるのか、を明らかにする必要があると考えられる。

本研究では、乳幼児の事故と保護者の事故防止に関する意識とその2つに影響を与える可能性のある家族背景を中心に調査を行う。これにより実際と相互の関連性を明らかにするとともに、乳幼児の事故を防ぐために看護職としてできることは何かを考える基礎的研究とすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 対象者

2004年8月～10月に三重県T市の保健センターにて1歳6か月児健康診査を受診した子どもの母親69名。その内1例のみ母親と祖母(母親の母親)の二人で回答した。

2. 調査方法

健康診査の待合時間あるいは健康診査終了後に、健康診査に訪れた子どもの保護者に調査の主旨を説明し、同意を得られた方に対しアンケート用紙を見ていただ

きながら、調査者(全調査を通して1名)が質問形式で尋ね得られた情報を書きとめた。

3. 倫理的配慮

健診に訪れた母親を対象に、調査の主旨を説明し同意の得られた方にのみアンケートを行った。アンケート結果については調査以外の目的で使用しないこと、個人が特定されず、対象者に不利益が及ばないように統計処理をすることを説明した。

4. 調査内容

1) 対象者の背景

子どもの性別、回答者と子どもの関係、子どもの同居家族の構成(父・母・兄・姉・祖父・祖母・おじ・おば・家政婦・いとこの有無と人数)、子どもの出生順位、子どもの母親の仕事(家庭外での仕事に限る)の有無、子どもの普段の保育場所、子どもの主な育児担当者

2) 子どもの事故経験とその内容

病院を受診するような事故の経験の有無、その内容(転倒・転落・誤飲・やけど・衝突・溺水・誤飲以外の窒息・はさむ事故に分類し、またその回数も尋ねた。)

3) 回答者の事故防止意識と子どもの事故経験

乳幼児の事故についての母子健康手帳のページを読んだ事があるかどうか、日ごろから事故防止について心がけているかどうか、回答者が今までに病院を受診するような事故にあったことがあるかどうか

4) 家庭内での事故防止対策について

1歳6か月以降3歳までの間に起こりやすい事故に対する家庭内での事故防止対策について①タバコや灰皿②ボタン型電池や硬貨③洗剤や殺虫剤、化粧品、医薬品④チャイルドシート⑤かみそりや包丁、ハサミなど⑥ポット、炊飯器、アイロン、熱い鍋など⑦お茶やコーヒー、味噌汁、カップラーメンの汁など⑧ストーブやヒーターなど⑨浴室の入り口の鍵⑩お風呂の残し湯の10項目。各項目はい・時々・いいえの3択(①についてはタバコは吸わない、④について車は使用しない、⑧についてそれらの暖房器具は使用しないをそれぞれ加えた4択)で問うものとした。

4. 分析方法

調査内容を、「対象者の背景」として兄弟の有無と出生順位・祖父母と一緒に住んでいるかどうか・母親の仕事・母親の事故経験・子育て者・子育て場所。「児の事故経験」として病院を受診するような事故の経験の有無・その種類(転倒・転落・誤飲・やけど・窒息・溺水・挟む)。「母親の事故防止意識」として心

がけがあるかどうか・母子健康手帳の乳幼児の事故に関するページを読んだか・家庭内での事故対策 (①～⑩の項目別事故防止対策の実施状況)。以上の3つに分類し、統計ソフト SPSS 10.0J for Windows を用いて χ^2 検定, t 検定を行いそれぞれの関連をみた。

IV. 研究結果

1. 対象者の背景

子どもの性別は男子 31 名 (44.9%), 女子 38 名 (55.1%) であった。兄弟の数としては、本人を合わせて「1人」が 29 名 (42.0%), 以下「2人」26 名 (37.7%) 「3人」12 名 (17.4%) 「4人以上」2 名 (2.9%) であった。年上の兄弟がいる児は 39 名 (56.5%) であった。

家族構成として、祖父または祖母と一緒に住んでいる児は 15 名 (21.7%) であり、祖父母と一緒に住んでいない、いわゆる核家族が 78.3% と大多数を占めた。

児の母親について、現在家庭外での仕事をしていると答えたのは 19 名 (27.5%), 現在育児休業中を含め仕事をしていないと答えたのは 50 名 (72.5%) であった。児の主な保育場所は、自宅が 52 名 (75.4%), 保育園が 16 名 (23.2%), 祖父母の家は 1 名 (1.4%) であった。主な育児者についても、母親が 66 名 (95.7%) とほとんどであり、「祖母」と答えた人は 3 名 (4.3%) と少数であった。

2. 1歳6か月児の事故経験

1歳6か月児の事故経験 (病院を受診するような事故) は、69 名中 18 名 (26.1%) であった。事故の種類としては「転落」が 7 名、「転倒」が 6 名、「はさむ事故」が 3 名、「誤飲」「やけど」がそれぞれ 2 名、「衝突」が 1 名であった。「溺水」「窒息」の経験者はいなかった。

3. 母親の事故防止意識について (表 1)

母親の事故についての意識のうち、「乳幼児の事故についての母子健康手帳のページを読んだ事がある」人は 55 名 (79.7%) 「日ごろから事故防止について心がけている」人は 57 名 (82.6%) であった。回答者自身の、病院を受診するような事故経験の有無については、「ない」が 56 名 (81.2%) であった。

ただ、「母子健康手帳は読んでいないけど、雑誌で詳しく書いてあるのを読みました」など、他の媒体から事故についての知識を得ているケースもあった。また、対象者の中には「今回は読んでいないがお兄ちゃんの時に読んだと思います」という言葉も聞かれた。

「心がけていない」人の理由としては「きりがない」

「特に気にしていない」であった。

4. 家庭内での事故防止対策 (表 1)

「①タバコや灰皿はいつもお子さんの手の届かない所に置いてありますか?」という質問に対し、「はい」が 33 名 (47.8%), 「時々」が 3 名 (4.3%), 「いいえ」が 2 名 (2.9%), 「タバコは吸わない」が 31 名 (44.9%) であった。家族にタバコを吸う者がいる場合に限ると、「はい」が 86.8% とほとんどを占めた。

「②ボタン型電池や硬貨、子どもの口に入る小さなおもちゃなどは、お子さんの手の届かない所に片付けていますか?」という質問に対し、「はい」は 41 名 (59.4%) にとどまり、「時々」が 12 名 (17.4%), 「いいえ」が 16 名 (23.2%) であった。

「③洗剤や殺虫剤、化粧品、医薬品などはお子さんの手の届かない所に片付けていますか?」という質問に対し、「はい」は 55 名 (79.7%), 「時々」は 10 名 (14.5%), 「いいえ」は 4 名 (5.8%) であった。

「④チャイルドシートを後部座席に取り付けて使用していますか?」という質問に対し、「はい」は 64 名 (92.8%), 「時々」は 1 名 (1.4%), 「いいえ」は 4 名 (5.8%) で、「車は使用しない」と答えた人はいなかった。しかし、この設問では取り付けの有無を聞くだけであったので、実際には必ず児をチャイルドシートに座らせているわけではなく、「嫌がる時はお姉ちゃんが抱っこしてます」「私が (母親) 運転しない時は私が抱っこします」との意見も多く聞かれた。

「⑤かみそりや包丁、ハサミなどの刃物は使用した後すぐ片付けていますか?」という質問に対し、「はい」は 58 名 (84.1%), 「時々」は 10 名 (14.5%), 「いいえ」は 1 名 (1.4%) であった。

「⑥ポット、炊飯器、アイロン、熱い鍋などはお子さんの手の届かない所に置いてありますか?」という質問に対し、「はい」は 52 名 (75.4%), 「時々」は 13 名 (18.8%), 「いいえ」は 4 名 (5.8%) であった。意見としては、「炊飯器は手の届くところにあるけれど、ご飯を炊く時間は気をつけています」「炊飯器は熱くなる前に一度触らせて、熱いということをつからせるようにして事故防止に努めています」などが聞かれた。

「⑦お茶やコーヒー、味噌汁、カップラーメンの汁などは例えばテーブルの端ではなく中央というようにお子さんの手の届かない所に置くようにしていますか?」という質問に対し、「はい」は 65 名 (94.2%), 「時々」「いいえ」がそれぞれ 2 名 (2.9%) であった。

「⑧ストーブやヒーターなどは安全柵で囲ってお子さんが手を触れないようにしていますか?」という質問に対し、「はい」が 45 名 (65.2%), 「いいえ」は 9

表1 母親の事故防止意識と児の事故経験

		児の事故経験		検定
		あり	なし	
母子健康手帳のページを読んだことがあるか	ある 55 (79.7%) ない 14 (20.3%)	16 (88.9%) 2 (11.1%)	39 (76.4%) 12 (23.5%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
事故防止について心がけているか	はい 57 (82.6%) いいえ 12 (17.4%)	14 (24.6%) 4 (33.3%)	43 (75.4%) 8 (66.7%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
①タバコや灰皿はいつも子どもの手の届かないところにあるか	はい 33 (86.8%) 時々 3 (7.9%) いいえ 2 (5.3%)	6 (85.7%) 1 (14.3%) 0 (0.0%)	27 (87.1%) 2 (6.5%) 2 (6.5%)	N. S
計	38 (100%)	7 (100%)	31 (100%)	
②ボタン型電池や硬貨、子どもの口に入る小さなおもちゃなどは、子どもの手の届かないところに片づけるか	はい 41 (59.4%) 時々 12 (17.4%) いいえ 16 (23.2%)	9 (50.0%) 4 (22.2%) 5 (27.8%)	32 (62.7%) 8 (15.7%) 11 (21.6%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
③潜在や殺虫剤、化粧品、医薬品などは子どもの手の届かないところに片づけているか	はい 55 (79.7%) 時々 10 (14.5%) いいえ 4 (5.8%)	12 (66.7%) 4 (22.2%) 2 (11.1%)	43 (84.3%) 6 (11.8%) 2 (3.9%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
④チャイルドシートを後部座席に取り付け使用しているか	はい 64 (92.8%) 時々 1 (1.4%) いいえ 4 (5.8%)	16 (88.9%) 1 (5.6%) 1 (5.6%)	48 (94.1%) 0 (0.0%) 3 (5.9%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑤かみそりや包丁、ハサミなどの刃物は使用した後すぐ片づけているか	はい 58 (84.1%) 時々 10 (14.5%) いいえ 1 (1.4%)	15 (83.3%) 3 (16.7%) 0 (0.0%)	43 (84.3%) 7 (13.7%) 1 (2.0%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑥ポット、炊飯器、アイロン、熱い鍋などは子どもの手の届かないところに片づけているか	はい 52 (75.4%) 時々 13 (18.8%) いいえ 4 (5.8%)	14 (77.8%) 3 (16.7%) 1 (5.6%)	38 (74.5%) 10 (19.6%) 3 (5.9%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑦お茶やコーヒー、味噌汁などはテーブル中央など、子どもの手の届かないところに片づけているか	はい 65 (94.2%) 時々 2 (2.9%) いいえ 2 (2.9%)	17 (94.4%) 1 (5.6%) 0 (0.0%)	48 (94.1%) 1 (2.0%) 2 (3.9%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑧ストーブやヒーターなどは安全柵で囲って子どもが手をふれないようにしているか	はい 45 (83.3%) 時々 0 (0.0%) いいえ 9 (16.7%)	15 (93.8%) 0 (0.0%) 1 (6.3%)	30 (78.9%) 0 (0.0%) 8 (21.1%)	N. S
計	54 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑨目を離れたすきに子どもが入らないように浴室の入り口に鍵をかけたか、開かないように注意しているか	はい 20 (29.0%) 時々 2 (2.9%) いいえ 47 (68.1%)	5 (27.8%) 1 (5.6%) 12 (66.7%)	15 (29.4%) 1 (2.0%) 35 (68.6%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	
⑩風呂の残し湯をしているか	はい 48 (69.6%) 時々 8 (11.6%) いいえ 13 (18.8%)	11 (61.1%) 1 (5.6%) 6 (33.3%)	37 (72.5%) 7 (13.7%) 7 (13.7%)	N. S
計	69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)	

名 (13.0%), 「それらの暖房器具は使用しない」が 15 名 (21.7%) であった。ストーブ、ヒーターなど床に設置するタイプの暖房器具を使っている家庭に限定すると、「はい」が 83.3% と高率を占めた。

「⑨目を離れたすきにお子さんが入らないように浴室の入り口に鍵をしたり、開かないように注意していますか？」という質問に対し、「はい」は 20 名 (29.0%) にとどまり、「時々」は 2 名 (2.9%), 「いいえ」が 47 名 (68.1%) であった。これについての意見として「残し湯をしていないので大丈夫と思って」「マンションなので鍵とかは勝手につけられない」などがあつた。

「⑩お宅では、お風呂の残し湯をしていますか？」という質問に対し、「いいえ」と答えたのは 48 名 (69.6%), 「時々」は 8 名 (11.6%), 「はい (残し湯をしている)」は 13 名 (18.8%) であった。残し湯をされている方は「朝、洗濯に使ってしまうので大丈夫です」と話していた。

5. 家族背景と 1 歳 6 か月児の事故経験との関係について

家族背景と 1 歳 6 か月児の病院を受診するような事故の既往の有無との関係、家族背景と事故の既往の関連について χ^2 検定を行ったところ有意差は見られなかった。ただし、事故が起りやすい傾向として次の

ようなことが見られた。母親が仕事をしている群で児に事故経験がある例は 7 名 (38.9%), 母親が仕事をしていない群で児に事故経験のある例は 11 名 (61.1%) であった。母親が病院を受診するような事故経験をもっている群で児にも事故経験があるのは 4 名 (22.2%), 母親に事故経験がなく児に事故経験がある例は 14 名 (77.8%) であった (表 2)。表 3 より兄弟の数が増えるほど、事故経験のある児の割合は減る傾向にあつた。

事故を種類別でみると、転倒・転落では兄／姉がいない児のほうがいる児よりも事故の経験ありの者の割合が高かつた。しかし、誤飲・火傷・衝突・はさむ事故を経験した児はいずれも兄／姉がいる児であつた (表 4)。

6. 家族背景と母親の事故防止意識 (表 5)

1 歳 6 か月児の母親の事故防止の心がけと家族背景との関連について、 χ^2 検定を行った。「祖父／祖母と一緒に住んでいるかどうか」に関連が見られ ($P < 0.05$), 祖父母のどちらもいない家庭のほうが事故防止に関して日ごろから心がけていることが分かつた。

また、家庭内で行われている事故防止対策と家族背景の関連について、「年上の兄弟がいるかどうか」と、「小さい物への注意」の有無に有意差が見られ ($P <$

表 2 家族背景と事故経験

		事故経験		χ^2 検定
		あり	なし	
子どもの性別	男	31 (44.9%)	10 (55.6%)	N. S
	女	38 (55.1%)	21 (41.2%)	
計		69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)
年上の兄弟	いる	39 (56.5%)	10 (55.6%)	N. S
	いない	30 (43.5%)	8 (44.4%)	
計		69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)
祖父母と同居	いる	14 (20.3%)	4 (22.2%)	N. S
	いない	55 (79.7%)	10 (19.6%)	
計		69 (100%)	14 (77.8%)	41 (80.4%)
母親の仕事	している	19 (27.5%)	7 (38.9%)	N. S
	していない	50 (72.5%)	11 (61.1%)	
計		69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)
母親の事故経験	あり	13 (18.8%)	4 (22.2%)	N. S
	なし	56 (81.2%)	9 (17.6%)	
計		69 (100%)	14 (77.8%)	42 (82.4%)
主な保育場所	自宅	52 (75.4%)	12 (66.7%)	N. S
	自宅以外	17 (24.6%)	6 (33.3%)	
計		69 (100%)	18 (100%)	51 (100%)

表3 家族背景（兄弟の数）と兄の事故経験

		事故経験		計
		あり	なし	
兄弟の数	1 人	8 (27.6%)	21 (72.4%)	29 (100%)
	2 人	7 (26.9%)	19 (73.1%)	26 (100%)
	3 人	3 (25.0%)	9 (75.0%)	11 (100%)
	4人以上	0 (0.0%)	2 (100%)	2 (100%)

表4 兄の種類別事故経験と年上の兄弟

		年上の兄弟	
		あり	なし
転 倒	あ り	2 (5.1%)	4 (13.3%)
	な し	37 (94.9%)	26 (86.7%)
計		39 (100%)	30 (100%)
転 落	あ り	3 (7.7%)	4 (13.3%)
	な し	36 (92.3%)	26 (86.7%)
計		39 (100%)	30 (100%)
誤 飲	あ り	2 (5.1%)	0 (0.0%)
	な し	37 (94.9%)	30 (100%)
計		39 (100%)	30 (100%)
や け ど	あ り	2 (5.1%)	0 (0.0%)
	な し	37 (94.9%)	30 (100%)
計		39 (100%)	30 (100%)
衝 突	あ り	1 (2.6%)	0 (0.0%)
	な し	38 (97.4%)	30 (100%)
計		39 (100%)	30 (100%)
挟 む	あ り	1 (2.6%)	2 (6.7%)
	な し	38 (97.4%)	28 (93.3%)
計		39 (100%)	30 (100%)

表5 家族背景と母親の事故防止の心がけ

		事故防止の心がけ		計	χ^2 検定
		あり	なし		
子どもの性別	男	25 (80.6%)	6 (19.4%)	31 (100%)	N. S
	女	32 (84.2%)	6 (15.8%)	38 (100%)	
年上の兄弟	い る	32 (82.1%)	7 (17.9%)	39 (100%)	N. S
	い ない	25 (83.3%)	5 (16.7%)	30 (100%)	
祖父母と同居	い る	9 (64.3%)	5 (35.7%)	14 (100%)	P<0.05
	い ない	48 (87.3%)	7 (12.7%)	55 (100%)	
母親の仕事	している	15 (78.9%)	4 (21.1%)	19 (100%)	N. S
	していない	42 (84.0%)	8 (16.0%)	50 (100%)	
母親の事故経験	あ り	11 (84.6%)	2 (15.4%)	13 (100%)	N. S
	な し	46 (82.1%)	10 (17.9%)	56 (100%)	
主な保育場所	自 宅	42 (80.8%)	10 (19.2%)	52 (100%)	N. S
	自宅以外	15 (88.2%)	2 (11.8%)	17 (100%)	
母子健康手帳を 読むこと	あ る	49 (89.1%)	6 (10.9%)	55 (100%)	P<0.01
	な し	8 (57.1%)	6 (42.9%)	14 (100%)	

0.01), 兄または姉がいる家庭において小さい硬貨やおもちゃを意識できていないことが分かった。

7. 1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識について

1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識について χ^2 検定を行ったところ明らかな差は見られなかった(表1)。しかし、種類別の事故経験と母親の事故防止意識との関連では、兄に転倒経験がある母親の事故防止意識は、転倒経験のない兄の母親の事故防止意識は有意に低く($P<0.05$)、チャイルドシート・残し湯についての項目で関連性に有意差が見られた。兄に転倒経験がある母親は、ない者に比べてチャイルドシートを後部座席に取り付けていない割合が高く(16.7%)、残し湯をすると答えた割合も高かった(66.7%)。(ともに $P<0.01$)。

V. 考 察

1. 事故の実際について

三重県では、平成13年度の乳児死亡総数63名のうち4名(6.3%)が不慮の事故による死亡である。これは同年における全国の乳児死亡総数3,599名中不慮の事故によるもの212名(5.9%)とあまり変わらないといえる。また、三重県では平成12年より県が実施主体となって母子保健強化推進特別事業として乳幼児の事故防止対策事業を行っている。

今回調査を行ったT市では、病院を受診するような事故を経験したことのある兄は69名中18名(26.1%)であった。これは先行研究⁴⁾の19.2%よりも高く、地域差とも考えられるが、対象数が異なるため明らかなことはいえない。しかし、事故を種類別にみると、転倒・転落が多く、全国調査と1位・2位は変わりなく、やはり1歳6か月という発達段階においては歩き始めということから転倒・転落の事故が多いと言える。

2. 母親の事故防止に関する意識について

まず、知識面であるが、母子健康手帳のページを読んだことのある人は約80%であった。しかし、第1子の時に読んだというケースもあったため、長村ら⁷⁾も指摘しているように、最初の子供の子育て経験に基づく保護者の自信から来る油断を招かないよう、第2子以降への事故防止の指導は重要となってくると考えられる。

次に、事故防止を心がけているかどうかについて、今回の調査では全体の82.6%が「日ごろから事故防止

について心がけている」と答えており、これは先行研究⁴⁾の86.1%とほぼ同じ結果となった。また、母子健康手帳を読んだことがある群が読んでいない群より事故防止について心がけがある人の割合が高かった。T市では、母子健康手帳の交付時や健康教育の場で母子健康手帳を読むよう声かけをしている。つまり、T市において母子健康手帳を使った事故防止についての啓発は母親の事故防止に対する自覚に効果を及ぼしていると考えられる。

項目別に家庭内の事故対策を見てみると、誤飲事故防止に関する項目では、①タバコや灰皿、③薬品については約80%以上の家庭で実施できており、②の電池・硬貨・小さいおもちゃについて注意がなされているものは約60%と低かった。野尻ら⁸⁾の報告によると、1歳6か月児の保護者は窒息・誤飲防止のための「小さい物への注意」は「はい」「時々」を含めても過半数が安全対策を行っていなかったとされていることもあり、これを裏づける結果といえる。次に、自動車乗車中の事故④チャイルドシートの使用についてであるが、この質問に対し、チャイルドシートを義務付けた法律の影響もあり90%以上の人が「はい」と答える結果となっている。ただ結果でも述べたように、今回の質問はチャイルドシートを後部座席に取り付けていることが主となっており、「後ろの座席に取り付けているけど実際嫌がって乗らない事も多い」などの意見も聞かれた。1歳6か月という年齢は子どもの成長発達の段階において自我が出始め、また好奇心が旺盛で一つの事に集中することが少ない時期でありチャイルドシートを嫌がる兄も少なくない。しかし、交通事故が起こった時のことを考えると非常に危険な行為であるため、チャイルドシートは、車に取り付けるだけでなく常時子どもを座らせておくことが重要である。そのため子どもが嫌がらないようなチャイルドシートと一緒に選びに行く・チャイルドシートに乗せる時の声掛けの工夫なども、事故防止のための保護者への教育内容に入れる必要があると考えられる。⑤刃物については、ほぼ全員が「はい」または「時々」片づけていると答えており、意識の高さがうかがえた。⑥ポット・炊飯器・アイロンなどの熱いものについては、「はい」と答えた人は75%にとどまったが、「炊飯器は手の届くところにあるけれど、ご飯を炊いている間だけ気をつけています」「炊飯器がすごく熱くなる前に一度軽く触らせて、熱いということをつからせるという風に事故防止をしています」など炊飯器の危険性を意識した発言が聞かれた。特に後者の意見は、子供に何が危険か体験を通して学ばせるという対策である。子供の発達から考えると、1歳6か月頃から命令を理解して

行動できるようになると言われているが、この時期の命令や禁止の理解はその場限りに過ぎないといわれている。従ってこの場合、永久的な事故防止対策にはならない。しかし、近年は親が過保護になって子どもにとって危ないものを事前に排除する事が多くなった。このことは子どもが自分の体験によって危険を回避するという能力にマイナスの影響を与えているという意見が保育士から聞かれた。親が事前に子供の危険を回避することも重要であるが、子どもの年齢や発達に応じては体験を通して事故防止について学ぶことも大切である。次に⑧暖房器具に対するやけど対策であるが、床に設置する暖房器具を使っている人に限定すると80%以上の人が安全柵を使っており、また「いいえ」の中にも、9月・10月に調査にご協力いただいた方の中には「去年はまだ子どもが小さく、必要なかったから、今年は買う予定です」という方もいるので、暖房器具の安全柵についてはほとんどの家庭で事故防止対策がとられていたと言える。次に⑨浴室の入口に子どもが入れないような工夫がされているかどうかであるが、注意している人は「はい」が30%弱と全質問のなかで最低の値となった。特に「残し湯をしていないから大丈夫」という意見が多く、保護者の意識の中で「浴室の危険」=「溺水」という観念が大きく空の浴槽に転落したり濡れた浴室の床で転倒したりといった他の事故の危険性についての意識がかなり薄いように感じられた。今後は浴室での事故の危険性について広く啓発していく必要があると考えられた。最後に、⑩残し湯についてであるが、これは気をつけている人が約70%と、⑨に比べて意識の高さがうかがえた。「朝洗濯に使ってしまうので大丈夫です」と答えた人も多かったが、いつもより子どもが早く起きたり、急な用事が入り残し湯がそのままになるなど、予想外のことも起こりうるので、残し湯をするのであれば同時に予防策も考えるよう指導する必要がある。溺水事故は、誤飲ややけど等の事故のように日常的に保護者が危険性を感じる状況があまりないため、⑨⑩の安全対策が他の項目よりも行われていないことにつながっているとも考えられる。しかし、溺水事故は1~4歳の不慮の事故の約25%を占め交通事故に次いで2番目に多いことや、日本で起こる溺水事故は家庭内で起こることが多いため、家庭内で十分に安全対策がなされるよう、安全教育を行っていく必要があると思われる。

母子健康手帳を読んだことがある者はそうでない者より事故防止についての心がけが有意に高かったことから、今後は母子健康手帳の事故防止に関するページをより多くの母親に読んでもらえるよう母子健康手帳を交付する際に働きかけたり、分娩後の退院指導や医

療機関での健診の際に医療関係者から指導することが有効であると考えられる。

3. 家族背景と1歳6か月児の事故との関連性について

今回の調査では、家族背景と事故の関連性は見られなかった。しかし、兄弟の数と事故の関係では、兄弟の数が増えるほど誤飲・やけど・衝突事故の発生が高まる傾向にあり、転倒・転落の事故は低くなる傾向が見られた。このことは、兄弟が増えることにより、家庭の中が雑然としてしまうことも一因となるのではないかと考えるが、転倒・転落は減少していることから明らかなことは言えない。しかし、誤飲は子どものおもちゃが原因のことも多く3歳児まで事故の上位を占めるので、指導の場面では留意する必要がある。家族背景と事故の種類についてはこれまでの調査でも関連は調べられていないため今後も調査を継続する必要がある。

小沢⁹⁾や田中¹⁰⁾によると、こどもの安全能力の多くは保護者の行動や考え方を見て知らず知らずのうちに学んでいくものであるという。今回の調査では、母親が病院を受診するような事故経験がある群と事故経験のない群では事故経験のある群で児の事故経験の割合が高くなる傾向が見られた。しかし、今回の調査では事故の経験がある母親の対象数が少ないことと、1歳6か月という年齢では学習効果を反映するよりは性格が大きく影響すると考えられるため、この点に関しても今後の調査が望まれる。

4. 家族背景と母親の事故防止意識との関連性について

母親の事故防止意識についての項目である母子健康手帳を読むことと家族背景については、有意差も傾向も見られなかった。次に、事故防止の心がけについては結果でも述べたように、祖父母と同居している母親の方が核家族よりも心がけが低かった。これは大人の目が多いため油断に繋がっていると考えられる。しかし、実際に子どもの事故防止という点では祖父母に守られ結果的には、事故発生率は同じという影響があると思われる。

5. 1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識との関連性について

1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識について、先行研究では関連性は指摘されていない。また野尻ら⁸⁾も事故経験は必ずしも事故防止対策に繋がっていない可能性を指摘している。今回の調査でも、児の事故経験と母親の事故防止意識との関連は見られなかった。しかし、事故の種類別に見ると関連性に違い

が見られ、転倒・転落では事故後の変化がないが、誤飲・やけど・衝突の事故では事故防止意識は高まっていることより、児が経験した事故の種類により母親の事故防止意識に影響を及ぼすのではないかと思われる。

6. まとめ

以上より、乳幼児の事故には母親の事故防止意識が関連すること、また、母親の事故防止意識は家族背景によっても影響を受けることが明らかとなった。母親の事故防止意識に働きかける方法として、母子健康手帳の活用が有効であり、母子健康手帳を読むことによって、事故防止の心がけや家庭内での対策へとつながることに期待できる。家族背景としては、特に第2子以降の出産では母親も油断しがちなので、再度意識して事故防止の指導することが望ましいと考える。その他の事故についても、母親全員が正しい理解をしているとはいえないため、詳しく説明する機会を設けることが必要と考える。

VI. 結論

1. 母親の事故防止意識について、母子健康手帳を読んだことのある群の方が、読んだことのない群に比べ事故に対する日頃の心がけがある者の割合が高かった。
2. 家族背景と1歳6か月児の事故との関係に有意な差は見られなかった。
3. 家族背景と母親の事故防止意識について、祖父母と一緒に住んでいる群は、核家族の群より日頃の心がけが低かった。また、兄弟がいる群はいない群に比べ、小さい物への注意が低かった。
4. 1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識について、明らかな差は見られなかったが、事故の種類別にみると、転倒経験のある児の母親は事故防止意識が低く、チャイルドシートの取り付け、風呂の残し湯の割合が高かった。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご理解及びご指導、ご協力頂きました三重県T市保健センターの皆様、健康診査に来られたお子様および保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生統計協会編：国民衛生の動向 第52巻第9号，2005
- 2) 市川光太郎著：救急現場で遭遇する事故の子ども達，小児保健研究第62巻第2号，2003
- 3) 濱耕子他著：1歳6ヶ月時および3歳児をもつ母親の子どもに対する事故防止意識と発生事故との関係，小児保健研究第62巻第6号，2003
- 4) 長村敏生他著：子どもの事故防止に関する保護者の意識調査（第2報），小児保健研究第63巻第1号，2004
- 5) 鶴田憲一他著：子どもの事故防止のためのアンケート調査，平成7年度厚生省心身障害研究「生活環境の子どもの健康におよぼす影響に関する研究」報告書，1996
- 6) 清水美登里他著：小児の事故防止のための保健指導の試みとその効果，児童研究，1996
- 7) 長村敏生他著：子どもの事故防止に関する保護者の意識調査（第1報），小児保健研究第62巻第6号，2003
- 8) 野尻孝子他著：保健所における小児の事故防止活動の展開，小児科診療，1996
- 9) 小沢道子他編：標準看護学講座29巻 小児看護学，金原出版，1999
- 10) 田中哲郎著：新子供の事故防止マニュアル 改訂第3版，診断と治療社，2003
- 11) 全国保育団体連絡会編：保育白書2003年度版，2003
- 12) 澤田和美他著：乳幼児の事故に関連する要因，小児保健研究第62巻第5号，2003

要 旨

不慮の事故は常に子どもの死因の上位を占めている。特に乳幼児の事故は居室内で起こることが多い。本研究では、家族背景と乳幼児の事故、母親の事故防止意識について調査を行い、これらの関連を検討することを目的に行った。

対象は、2004年8月～10月に三重県T市の保健センターで1歳6か月健診を受診した子どもの保護者69名で、質問紙表に沿って聞き取り調査を行った。

その結果以下のことが明らかになった。

1. 母親の事故防止意識について、母子健康手帳を読んだことのある群の方が、読んだことのない群に比べ事故に対する日頃の心がけがある者の割合が高かった。
2. 家族背景と1歳6か月児の事故との関係に有意な差は見られなかった。
3. 家族背景と母親の事故防止意識について、祖父母と一緒に住んでいる群は、核家族の群より日頃の心がけが低かった。また、兄弟がいる群はそうでない群に比べ小さい物への注意が低かった。
4. 1歳6か月児の事故経験と母親の事故防止意識について、明らかな差は見られなかったが、事故の種類別にみると、転倒経験のある児の母親は事故防止意識が低く、チャイルドシートの取り付け、風呂の残し湯の割合が高い傾向があった。

キーワード：乳幼児、不慮の事故、事故防止意識

資料 1

子どもの事故防止に関するアンケート

1. あなたとお子さんについてお尋ねします。

- ①お子さんの性別 1) 男 2) 女
- ②兄弟の数（今回健診のお子さんを入れて・・・）
1) 1人 2) 2人 3) 3人 4) 4人以上
- ③今回健診に来られたお子さんは、兄弟の中で上から
1) 1番目 2) 2番目 3) 3番目以降 4) 4番目以降
- ④ご家族（一緒に住んでいらっしゃる方）は
1) お父さん 2) お母さん 3) お兄さん 4) お姉さん
5) おじさん 6) おばさん 7) おじいさん 8) おばあさん
9) 家政婦さん 10) いとこ
- ⑤あなたは、今回健診に来られたお子さんの…
1) お母さん 2) お父さん 3) おじいさん 4) おばあさん 5) それ以外
- ⑥今回健診に来られたお子さんの、お母さんはお仕事（パート含む）をされていますか？
1) はい 2) いいえ
- ⑦お子さんの普段の保育場所について
1) 自宅 2) 保育園 3) おじいちゃん・おばあちゃんの家 4) その他
- ⑧お子さんの育児に最も関わっていらっしゃる方は…（1つ選んでください）
1) お父さん 2) お母さん 3) おじいさん 4) おばあさん
5) おじさん 6) おばさん 7) 家政婦さん

2. お子さんの事故経験とあなたの事故経験についてお尋ねします。

- ①今回健診に来られたお子さんは、以前に、病院を受診することになった事故（下記のようなもの）をされたことがありますか？
1) ある 2) ない
- ②「ある」とお答えいただいた方にお尋ねします。その事故の種類と回数について教えてください。
1) 転倒（ ）回 2) 転落（ ）回 3) 誤飲（ ）回
4) やけど（ ）回 5) 衝突（ ）回 6) 溺水（ ）回
7) 誤飲以外の窒息（ ）回 8) はさむ事故（ ）回
- ③「乳幼児の事故と主な原因」についての、母子健康手帳のページを読んだことがありますか？
1) はい 2) いいえ
- ④日ごろから、事故防止について心がけていらっしゃいますか？
1) はい 2) いいえ
- ⑤あなた自身、病院を受診するような事故（交通事故や、やけど、転倒、転落など）をされたことがありますか？
1) ある 2) ない

3. お子さんの事故防止のためご家庭で行っていらっしゃることにしてお聞きします。

- ①タバコや灰皿はいつもお子さんの手の届かない所に置いていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ 4) たばこは吸わない
- ②ボタン型電池や硬貨、子どもの口に入る小さなオモチャなどは、お子さんの手の届かない所に片付けていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ③洗剤や殺虫剤、化粧品、医薬品などはお子さんの手の届かない所に片付けていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ

- ④チャイルドシートを後部座席に取り付けて使用していますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ 4) 車は使用しない
- ⑤かみそりや包丁、ハサミなどの刃物は使用した後は必ず片付けていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ⑥ポット、炊飯器、アイロン、熱い鍋などはお子さんの手の届かない所に置いていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ⑦お茶やコーヒー、味噌汁、カップラーメンなどは例えばテーブルの端ではなく、中央というようにお子さんの手の届かない所に置くようにしていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ⑧ストーブやヒーターなどは安全柵で囲ってお子さんが手を触れないようにしていますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ⑨目を離したすきにお子さんが入らないように浴室の入り口に鍵をかけたり、開かないように注意していますか？
1) はい 2) 時々 3) いいえ
- ⑩お宅では、お風呂の残し湯をしていますか？
1) いいえ 2) 時々 3) はい

ご協力ありがとうございました。